

私と天文学 [I]

天文学と数学

— 1 ファンの思い出 —

一 松 信

(京都大学数理解析研究所)

若い頃天文学者になりたいと思った人は、かなり多いらしい。じつは私もその一人である。それが数学に転向したのは、夜間の天体観測に、体力的に自信がなかったためである。もっとも現在では、天文学も宇宙科学として総合科学となり、もっぱら測定器を製作したり、計算機の端末機の前に座っていたりして、星を見ない天文学者も少なくないらしい。

考えてみれば、天文学と数学とは永らくほとんど一身同体だった。両者がはっきりと分離したのは、19世紀以降のようである。いまでは太陽系天文学は、観測する対象から、測定器を送って直接測る物理学的な対象になってきたが、計算機を介して応用数学とは、以前よりもいっそう密接な関連が生じたいらしい。天体の進化の計算において計算方式を変えると答が変わり、どれが本当なのか不明といった、数値解析の研究者の立場からも、ぜひ解明したい問題もきいたことがある。またいささかSFめくが、宇宙に知的生物がいるとしたとき、それとの情報通信をいかにして行うかというのは、情報科学の最も根本的な設問の1つである。

もっとも現在の私は、天文学に対しては、単なる局外の1ファンにすぎない。世界の各地に旅行したついでに、天文遺跡をたずねたり、各地で見た星空を思い出に留めたりしているのがせいぜいである。1963年7月には、北海道に皆既日食を見にいった(場所の選定を誤って、悪天候に泣いた)が、1983年のインドネシア日食のように、日本から1000人もでかけるとなると、かえ

って行ってみる意欲を失った。

個人的な思い出になるが、国内で見た最も感激した星は、1945年暮れに疎開先の諏訪から最終的に引き揚げた折の帰途、甲府の付近で見た昇る北斗七星の雄大な姿だった。外国では、マレーシアで5月の夕方南西の空に見た異様に明るい2つの星(シリウスとカノープスだと気づくまでにだいぶかかった)や、オーストラリアで見た逆立のさそり座と横倒しの南十字星が、特に強く印象に残っている。5月にシンガポールで、太陽が北から照るのを意識しすぎて、かえって帰国後方向が怪しくなり、京都の街の中で道に迷いかけた話などは、とんだドジである。少々頭がおかしいといわれてもしかたがないのかもしれない。

☆ ☆

☆ ☆ ☆

◇ 1月の天文暦 ◇

日 時	記 事
3 14	朔
4 7	地球 近日点通過
6 13	小寒 (太陽黄経 285°)
8 5	月 最遠
11 10	水星 留
11 19	上弦
18 23	望
20 7	月 最近
21 6	大寒 (太陽黄経 300°)
22 13	水星 西方最大離角
25 14	下弦

◇ 1月の日月惑星運行図 ◇

